

ん。ど。ん。越前にてつりあ。ん。ど。ん。又はつ。ほう。又につ。ほん。といふ津國にてもは。つ。ほう。武藏にてさ。んとく共云、

〔和漢三才圖會三十二家飾具〕行燈 阿牟止字 遠州行燈或圓周ノ二字トス、

三才圖會云影燈燭臺書燈不知其制之所始殆後人以意創爲之者三物雖皆借光於燭然或以障風其用則同歸耳

按影燈書燈共今稱行燈其一脚者仆易故今不用近世制圓而有內外三柱上下設輪內者不搖外者能旋開闔任意或云小堀遠江守正一始制之故俗曰遠州行燈

〔北禪遺草五記〕書燈記

世有遠州燈者遠江守小堀政一所創海內莫不用也其製圓欄張紙以籠燈分半爲扉開之匝轉而襲于後爲柱凡六左右則相重爲界上二輪亦相重下則圓匣以植三柱含一柚以貯燈心圓外爲闕輪縮承扉可轉也中間鐵條繫左右與後架小圈用安燈盞焉上輪橋著鐵鉤可提也昔者吾宇先生用爲書燈乃去中間鐵條立一巨柱闕如二柱銜短衡上下自在衡端以架燈盞偏重則澀止其低昂以隨看書寫字之便也先生爲文記之因嘆匡衡之壁車胤之螢孫康之雪江泌之月畢誠之薪皆不如我之有燈而我之有燈乃終於有燈而不如彼輩之終立身著名哉是其爲慷慨奚若也太田見良嘗謂先生曰比歲儉米貴吾與君等所尤病也先生曰吁一掬之米可以并日而不餓抑何所病但米貴物從之乃使油貴是吾所獨病也先生之志於是乎可知已

〔菟裘小錄〕書燈は、かろくしてまどかなるべし、玻璃をはりたるはくらし、夏蟲の飛入て、油のうちにてさわぐをみるもくるし、なつはちひさきもちもてはりし、三つ折のべうぶのうへに、承塵のやうにもちつけたるをたてまはせば、はひもかもちかづかず、ひるつかたうた、ねするにもよし。